3 放牧牛の選定

（1）放牧対象牛

放牧馴致（じゅんち）された牛であれば育成牛から繁殖牛まで問題はありません。しかし、放牧地での捕獲や発情看視等の観察が舎飼時に比較して困難なこと、草地の栄養価が総じて低いこと等から種付け後妊娠を確認した牛の放牧が推奨されます。

なお、放牧牛は１頭だけだと不安になり脱柵しやすくなるので、２頭以上の放牧を行うようにします。また、放牧経験のない牛の場合は、放牧経験牛と一緒に放牧すると草の食べ方や飲水場などを早く覚えさせることができます。

（2）放牧頭数

放牧牛が１日当たり生草を食べる量は体重の約１割といわれており、繁殖和牛２頭を放牧する場合の目安は、10ａ当たり10日程度という報告があります。しかし、未利用地の草種は様々であり、放牧時期によって植生の状態が変動するので、一概に放牧頭数と放牧可能日数を決めることはできません。

また、食草が少なくなると脱柵の危険性が高くなりますので、牛の観察時に寄ってきて鳴いたり、電牧線の隙間から頭を出して外の草を食べるような状態になった際には牛を移動させる必要があります。

（3）放牧馴致

●気象環境、飼料に対する馴致

放牧は舎飼に比べ雨、風などの厳しい環境条件にさらされることになります。また、舎飼時の配合飼料や乾草などの人間が与える飼料から生草だけの採食に変わるため、第一胃内の微生物の種類がこれらに合わせて変化することになります。

そこで、このような環境の変化に対応するための馴致が重要となります。

馴致の方法は、放牧前は極力屋外に出すとともに、配合飼料を給与している場合は段階的に減量し乾草のみの給餌とし、生草も与えて水分の多い草にも慣れさせます。近くに放牧地がある場合は昼間放牧できれば理想的です。

また、放牧未経験牛の場合、放牧地に生えている草を食べたことがないため、生草を食べることができない牛もいます。このため、自分で採食できるように放牧経験牛と一緒に馴致または放牧を行います。

電気牧柵への馴致

未利用地放牧では設置や撤去が簡単なうえ低コストなことから、放牧柵には電気牧柵が利用される場合が多くなっています。

一方、電気牧柵は予め放牧牛が感電し電牧線が危険なものであると学習し、近づかないようにしておかないと脱柵の危険性が高くなります。特に、はじめて電牧線に感電した牛は、興奮し電牧線に突進し脱柵することもあります。このため、放牧開始前の電気牧柵への馴致は脱柵の危険を防止するために非常に重要です。

馴致の方法は、鼻面を強制的に電牧線にさわらせ覚えさせる方法と牛舎内やパドックに電牧線を張って牛自身が自然に電牧線にふれ覚える方法があります。強制的に覚えさせる方法は、短時間ですみますが人間に対する恐怖心を植え付けることにもなるので、自然に覚える方法をお勧めします。

なお、自然に覚える方法での電気牧柵馴致は、１週間程度で充分ですが、確認のためには、電気牧柵の先に配合飼料を置き、配合飼料がなくならなかったら馴致完了 と判断します。

＜パドックに電気牧柵を設置し馴致＞